

## 4 工業

かつて、青梅の工業が綿夜具地などの繊維製造工業を中心に発展してきました。図表4を見ると、昭和38年の工場総数のうち、全体の約70%が繊維工場でした。もともと綿夜具地の生産は農家の副業として発達したもので、工場の規模は小さく、当時の市内の工場の半分以上が従業員10人以下の小規模工場だったのです。



繊維工場（昭和30年頃）

産 業	工場数
食料品製造業	54
繊維工業	437
衣服・身のまわり品製造業	15
木材・木製品製造業	40
寝具・装備品製造業	15
パルプ・紙・紙加工品製造業	3
出版・印刷関係製造業	5
科学工業	1
ゴム製品製造業	1
窯業・土石製品製造業	7
鉄鋼製品製造業	2
金属製品製造業	20
機械器具製造業	6
電気機械器具製造業	17
輸送用機械器具製造業	7
計量器・測量器・測量機械・医療機械 理化学機械・光学機械・時計製造業	8
その他	6
計	644

（「東京都統計年鑑」（昭和38年版）より）

図表4 青梅市産業別工場数

青梅の鉱業としては、古くから石灰が有名でした。江戸と青梅を結ぶ青梅街道や成木街道も石灰運搬の必要から開かれたものです。また、明治27年に開通した青梅鉄道（現JR青梅線）も、日向和田の石灰石採掘の運搬が大きな要因となりました。しかし今日においては、石灰石採掘の事業所は市内でもわずか1か所となっています。

このように繊維工業と石灰を中心に発展してきた青梅も、戦後の日本経済の復興とともに、電気・光学機械などの近代工業が進出し、さらに市独自の積極的な工場誘致によってますます近代工業化が進んでいます。



石灰石採掘場（昭和30年頃）

現在の青梅市の工業を図表5で見ると、電気機器工業、金属機械工業が青梅市全体の工業の40%以上を占めており、この地域における工業の特色となっています。これは多くの事業者が、かつて青梅を支えた繊維工業の不振から機械工業へと転換をせまられた結果であるとともに、三ツ原工業団地や西東京工業団地といった現在では、青梅の工業の中心となっている地域への多くの電気・機械工業関連の大企業の進出が、その理由として考えられます。

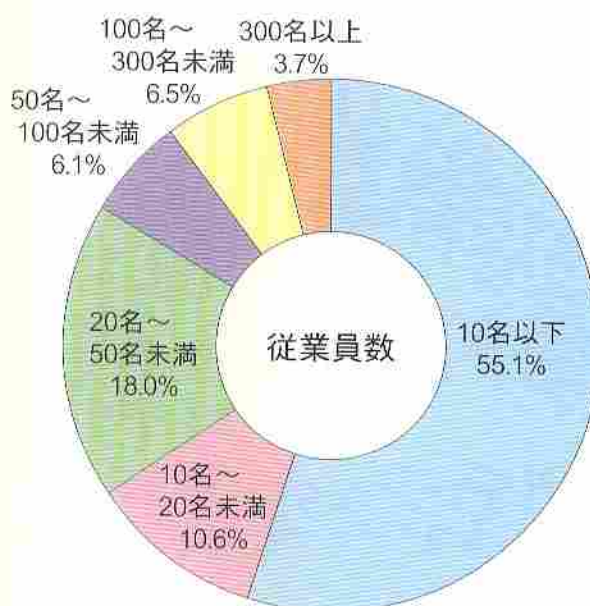


青梅市の工業の規模は従業員数から見てみると、図表6のとおり、従業員数10人未満の事業所が全体の55%を占めており、かつての繊維工業中心の時代とほとんど変わっていません。しかし、出荷額ではここ30年間で46倍にもなっています。

区 分	事業所数	従業者数
食料品	42	745
飲料・飼料・たばこ	5	109
繊維工業	20	137
衣服・その他の繊維製品	26	351
木材・木製品	26	107
寝具・装備品	46	278
パルプ・紙・紙加工品	6	58
出版・印刷・同関連産業	13	242
化学工業	7	424
石油・石炭製品	2	*
プラスチック製品	67	686
ゴム製品	3	28
窯業・土石製品	13	142
鉄鋼業	4	53
金属製品・一般機械器具	213	2096
電気機械器具	120	7040
輸送用機械器具	43	929
精密機械器具	38	645
その他製造業	16	107
合 計	710	14177

(西多摩統計誌(平成6年度版)より)

図表5 青梅市の工業



(平成3年青梅市工業統計より)

図表6 従業員数